

【小学生の部】最優秀賞

「わたしにもできること」

福井市豊小学校 1年 山村 柚月



なつやすみに、おとうさんのおともだちの
びょうしつで、わたしともうとのあやちゃ
んは、かみのけをきりました。

びょうきでかみのけのないおともだちにあ
げるためです。

わたしのおとうとのけいくんは、びょうきで、
さんかいにゆういんしたことがあります。

わたしとあやちゃんは、ちいさいので、けい
くんのおみまいは、いけませんでした。

でも、そのびょういんには、まいにちまいに
ちたくさんのおくすりをのんでがんばって

いるおともだちが、にゆういんしていると、
おかあさんがいっていました。びょうきでか

みのけのないおともだちにもゆういんして
いるといっていました。

だから、びょうきのおともだちにかみのけ
をきふできると、おかあさんにおしえてもら
ったとき、わたしもあやちゃんもだいさんせ
いしました。

きふというのは、こまっているひとのおて
つだいをしてあげることだとおかあさんが
いっていました。

かみのけをきふしたら、そのかみのけをたく
さんあつめて、ぼうしみたいなかみのけにし

てびょうきのおともだちにふれぜんとする
そうです。だから、わたしとあやちゃんは、

がんばってかみのけをのぼしました。
のぼしているときは、とてもたいへんまし

た。なんかいもきりなくなりました。かみの
けをあらうときや、すいみんぐのとき、たい

へんでした。でも、おかあさんにかみのけを
あしたきるといわれたら、とてもかなしいき

もちになりました。
あやちゃんもたくさんきりたくないといひ

ました。
そうしたら、かみのけをもらったおともだ

ちのおてがみをおかあさんがよんでくれま
した。もらったおともだちは、とてもうれし

そうでした。

だから、わたしとあやちゃんは、かたより
みじかくかみのけをきりました。

かみのけをたくさんきつたらとてもうれし
くなりました。

つぎのひ、ふうとうにかんじをかいて、そ
のなかにかみのけをいれました。

そして、ゆうびんきよくでおもさをはかって
もらって、きつてをはってもらいました。

そのあと、あやちゃんとゆうびんぼすとい
れました。ぼすといれたら、もつとうれし

くなりました。
はやくおともだちに、わたしとあやちゃんの

かみのけでつくったかみのけが、とどくとう
れしいです。

つぎはもつとながくかみをのぼして、また
きふしたいです。はやくのびてほしいです。



【中学生の部】最優秀賞

「循環型ボランテア」

福井大学教育学部附属義務教育学校

9年 金巻 明希



今まで、ボランテア活動って何してきただろう…と振り返ってみました。遠方の中学に通い、音楽活動主体の日々を送っていることで地域のイベントや奉仕作業に携われない私。

学校では、より良き学校を目指し積極的に活動しているものの、地域や社会での貢献となると、何ができているのだろう。

昨年の夏、祖父母が利用している高齢者サポート施設で演奏してくれないか。という依頼を受けました。一人では自信がないし困るなあと思っていた頃、音楽仲間の先輩友達と一緒に演奏することを引き受けてくれ、共演を楽しみに依頼を受けました。普段自分が取り組んでいる曲とは違い、お年寄りに楽しんでいただける曲探しを始めました。

チェロとフルートの楽譜でないときは、自分たちでアレンジしたり、二人で合わせの練習をしたり曲の順番を決めたり、どれも初めての経験でとても勉強になりました。しかし、演奏会進行役も自分たちで原稿を考え、行わなければならない、と決まった時は面倒くさいなとも思いました。

当日、指定された時間に何うと会場準備やプログラム作成がされていきました。

演奏会のために、施設の方々が汗だくで、

利用者の方を搬送したり接待している様子を目の当たりにして、面倒くさいなんて思った自分を反省し、演奏会を絶対成功させるために頑張るぞという気持ちで本番を迎えました。慣れない進行役は始めはぎこちなかったですが、演奏中、皆さんが穏やかな表情で何度もうなずく様子、目を伏せて曲に合わせながら首を揺らす様子。そんな様子を見て、徐々に打ち解けることができました。

最後の「ふるさと」の演奏では、皆さんがメロディーに合わせて歌いだしてくれ、私自身幸せな時間と空間を味わい、感動したことを思い出しました。はじめは友達と共演できることを楽しみにしていただけの自分でしたが、終わった時には達成感と感謝の気持ちで一杯になりました。それにたくさん、「ありがとね。」と言われ、嬉しかったのと同時に、私からも「ありがとごさいました。」と伝えました。

この経験で、周りが支えてくれるからこそ自分が演奏できるんだとわかったからです。社会に貢献しよう、なんていう大きな考え方は必要ないのかもしれませんが、自分が自発的に取り組んだことにより、周りの人を温かい気持ち・幸せな気持ちにできる。

自分の心も豊かになる。そして、最終的には自分を成長させることができて次への新たなステップになる。これこそがボランテアの本意だと気づきました。そのためには、自分に可能なことは自発的に取り組んでいくことが大切なのだと思います。

早速、夏休み中、校内清掃ボランテアに参加しました。活動開始前に校長先生が、「ボランテアで社会活動に参加する事は、自己の成長をも促す。」とおっしゃっていたので、なお一層清掃を頑張りました。汗と埃まみれになりましたが、すつきりした気分になりました。やっぱり、ボランテア活動に参加できて良かった、という満足感がありました。

これから高校生になると、活動できることが増すと思います。私の力は微力かもしれませんが、今回のようにコツコツとボランテアを続け、隣から周りから温かくしていき、自己を成長させる。その繰り返しをどんどんレベルアップして、社会に貢献できる人になれるよう努力していきたいです。

今後もボランテアに関心を持って、自分が少しでも社会に役立てるように、身近なことから頑張っていきたいと思えます。

【高校生の部】最優秀賞

「わたしが出来ること」

福井県立足羽高等学校 3年 奥川 未久



今年の春、私達JRC部の先輩達がJR福井駅西口とJR福井駅ホームの触る地図と点字の説明文を作りました。するとそれを見た視覚障がい者の方から、地図を使いながら一緒に福井駅を歩きませんかというお誘いがあり、七月に実現しました。

視覚障がい者の方と一対一で、確認したい場所までの点字ブロックを説明しながら歩くのです。

私たちは事前に学校内と福井駅西口で、アイマスクを付け白杖で歩く体験をしました。点字ブロックが分からなくなった時に大きな恐怖を感じますが、人の声がすると、ぶつかるのではないかと不安になります。自分が見えていないせいか、相手にも自分が見えているのかとても心配でした。

ですが、視覚障がい者の方は、きっと私の想像以上の不安を感じているに違いありません。初めて一対一で障がい者の方と接することに大きな不安を感じると共に、とても緊張してしました。

私が担当になった女性は、福井駅周辺がよく分からないのであまり外出したくないと話していました。用事がある時にはタクシーを使い、駅に着くとタクシーの運転手さんに切符を買ってもらい、次は駅員の方に電車に乗せてもらうのだそうです。話を聞いてみると、とても窮屈な感じがありました。私にも何度もお礼を言っ

も何度も何度もお礼を言いながら、電車に乗るんだろうなあと思いつき始めました。

駅の中のショッピングセンターに行くと、点字ブロックが案内所で途切れてしまっていて、壁をつたいながら移動することもできません。「かん」を頼りに白杖でまっすぐ歩かなければならないのです。案内所より向こうのお店やトイレに行くためには、案内所の方をお願いしなければなりません。

もし駅やショッピングセンターの地図が頭に入っていたとしても、これでは私も外出したくないと思いました。その時です。

その方が、目的地と目的地を結ぶ道の歩数を数えたいと言いました。視覚障がい者の方は、距離を歩数に置き換えて把握するのだそうです。そのため、歩幅に気を付け何度も何度も同じ場所を歩いて確かめるのです。その歩幅を私がメモをし、それを家で誰かに読んでもらい、歩数を覚えるのだそうです。

目が見えない人は、点字ブロックをたどって歩けばいいと思っていましたが、目が見えないということが想像以上に大変なことなのだと分かりました。それにその方は、人に補助をお願いするのは申し訳ないので、あまり頼みたくないのだと言っています。

私は、多くの方がそんな風に考えているのだとしたら、もっと多くの方が歩けるように手助けをしたいと思いました。

約一時間、一緒に福井駅周辺を歩いた後の、反省会の場で、その女性が、

「今まで街の中を歩くのが怖いので用がある時は、タクシーを使い、運転手さんに誘導してもらっていたけれど、今日説明してもらったので一人で歩く自信ができました。今度は一人で歩いてみたいし、切符を買うようになりたい。」

と笑顔で言ったのです。

そのことばを聞いた瞬間、その方の安全を守るための「目」の一部になれたことがとても光栄に感じられました。とても嬉しかったのですが、同時にボランティアに対する考え方が少し変わりました。今までは、ボランティアとは困った人を助けるものだと思っていました。しかし、この方と一緒に歩きながら、自分で自由に行きたいところに行けるように協力できることこそが、大事だと気付いたのです。

先輩達が点字の地図を作ったのも、点字ブロックをたどって歩けば安全だという考えではなく、一人で歩くことは大変だからその助けになればいいという考えだったのではないかと思います。

その方と約二時間、一緒にいたのですが、最後に「今日はありがとう。」と言ってくれた笑顔は、本当に素敵な笑顔でした。その方に、もっとたくさん笑顔があふれるよう力になりたいと強く感じました。

【一般の部】最優秀賞

「歌を紡ぐ指」

福井市

小田 英子



夫は現在七十二歳。全国でも稀な全盲の理学療法士として、四十年近い間、病院に勤務してきたが、定年後は、趣味にしていた声楽を生き甲斐として、アマチュアながら、ソロや合唱などの演奏活動を続けている。

ふり返ってみれば、仕事上の医学書も趣味の楽譜も、夫は生活の全てに、点字を使用する境遇であり、在職中も、そして現在もなお、点訳、朗読、音訳と、ボランティアの方々に多大なお世話を頂いてきた。それもごく普通の文章のみならず、医学書と、楽譜という、ことさら厄介この上ない代物ばかりである。

今日では、点訳作業も多少コンピュータ化されては来たが、テープレコーダーと、点字タイプライターだけが頼りの時代は、ほんの数頁の本であっても、それこそ膨大な気力体力と時間が必要であった。ことに医学書は、日本語の場合、辞書があれば大抵何とか事足りるが、英語の文献や、図表や写真などは、音訳、朗読ともに、ボランティアの方々に変な苦勞をお掛けしたものである。さらに、現在もつともお世話になっているのが、楽譜の点訳である。

医学書ほどの複雑さはないにしても、点字の欠点である崇高さが解消される訳もなく、オペラアリアの楽譜一段が、点字用紙一頁になることなど、決して珍しくはない。しかも、現在所属している合唱団は、数多くのステージを

こなしているが、全て暗譜での演奏であり、楽譜を渡された次の週の練習日までは、点訳された楽譜をもとに、ある程度の音取りが出来なければ、パートメンバーに迷惑をかけることになる。そこで、わずかに二、三日のうちに点訳して頂くという実に無理矢理なお願いを、毎回叶えていただいている。点訳して下さる点訳友の会のメンバーは、主に主婦の方が多く、家事の時間をやりくりしての活動である。折りしも今日も、点訳のTさんが、気温三十五度近い猛暑日の炎天下を、それも自転車で、点訳し終わつた分厚い楽譜をたずさえて、少しでも早く渡したいと飛んで来られた。本当に本当に、頭が下がるばかりである。

聞けば、ボランティアの語源は志願兵であるとのこと。無償であることは勿論、時には命の問題までを孕んでいる。深く追求すれば決して気軽なものではない。しかも、従来の日本には、馴染みのない理念でもある。が、この理念が、若い人達を中心として、ここ半世紀あまりの間に、スポンジに沁み込む水のごとく、あらゆる場面に浸透しつつあるという事実を、心から喜ぶたい。

夫は、この十年来、余病を発し、立って歌うことは叶わなくなつたが、それでもピアノの弾き語りも、オペラの場面でも、座って歌うことはいっぱいあるよ」と、合唱に加えて、ソロの演奏活動をも懸命に続けている。

これこそが、今の彼にもつとも相応しい社会参加だと思い、私も一緒に楽しみつつ、ハーネス無しの盲導犬として付き人を務めている。そして、どのコンサートにも、必ず点訳して下さった方々をご招待するのが、彼の大きな喜びの一つである。つい先日、音楽愛好家の小さな集まりでコンサートが開かれ、聴きにいられた方に「佳いものを聞かせていただきまして！」と涙交じりに挨拶された彼は、嬉しさこの上ない面持ちで、固い固い握手を交わしていた。

私は思う。さりげない心配りや、ささやかな親切が、町中に浸透してさえいけば、立派なバリアフリーの設備を必要としない場合も多々あるのだと。他者を思いやる心こそ、何にも増して大切な、町と人々の財産なのだ。

この秋も、幾つかのコンサートが予定されているが、恒例の病院コンサートも、彼の大切なイベントの一つで、先述のTさんが持つてこられた楽譜に、早速指を走らせて、大好きな日本歌曲を紡ぎ始めている。声高にノーマライゼーションを叫ぶより、ボランティアを受け取る立場の人々が、日々、前向きにこやかに心充たされて過ごすことが、ボランティアの尊い意義であり、真のノーマライゼーションだと、私は信じる。(この一文は無力な私の使命として、心からのお礼状に代えさせていただきたい。彼を支えて下さっている数多くの方々に、ことに、目立つことのない点訳という活動に、日々汗しておられる方々に、精一杯の、感謝と敬意を表したい。)